

特集 「2020 年度人工知能学会全国大会（第 34 回）」

オーガナイズドセッション総括

辻 順平（東洋大学）、梶原 智之（大阪大学）、
成田 和弥（(株) Insight Tech）、長谷川 大（北海学園大学）

2020 年度人工知能学会全国大会（第 34 回）のオーガナイズドセッション（以下、OS）では、26 件の OS が応募および採択され、表 1 に示す 25 件が実施された。2018 年度より同一 OS の実施を通算 3 回までに制限しているが、今年度は半数を超える 14 件が新規 OS であり、「萌芽的な研究テーマや学際的課題など、一般セッションには収まらないテーマについて深い議論を行う」という OS の趣旨に沿った魅力的な企画を集められた。なお、通算 3 回実施された OS テーマについては、オーガナイズからの提案をもとに一般セッションテーマへの追加を検討している。今年度で通算 3 回の実施となった 9 件の OS オーガナイズには、一般セッションテーマへの追加もご検討いただきたい。

OS では、2017 年度より特別企画あり・なしの 2 種類の実施形態をとっている。前者は、通常発表に加えて招待講演やパネルディスカッションなどの企画を実施するもので、100 分×2 枠を上限として構成される。後者は通常発表のみを実施するもので、セッション枠数に上限を設けない。いずれの実施形態においても、プログラム編成の都合上、一部の発表を一般セッションに移行していただく場合がある。今年度は 15 件の OS において、それぞれ魅力的な特別企画が実施された。

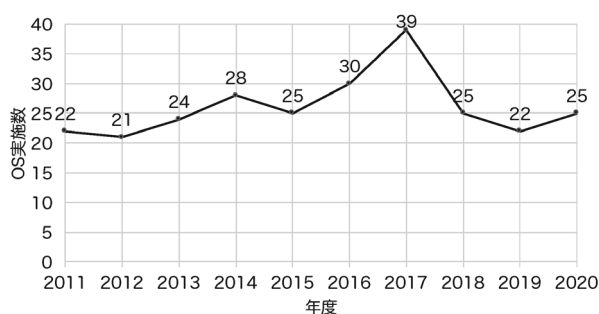


図 1 OS 実施数の推移

OS 実施数については、図 1 に示すとおり、2018 年度の実施回数制限の導入により減少傾向にあった。しかし、今年度は多くの新規 OS を企画いただき、回復の兆しが見えつつある。ぜひ来年度も多くのご提案いただき、新たな研究領域が形成されることを期待する。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、今年度の OS は Web 会議サービスを用いて実施された。オンライン開催に伴うさまざまな制約のもと、OS 実施に多大なるご尽力をいただいたオーガナイズ各位をはじめ、発表者および参加者のすべての皆様にお礼を申し上げ、2020 年度の OS 総括とさせていただきます。

表 1 JSAI 2020 における OS 一覧と発表件数

| 番号 | セッション名 | 件数 | 番号 | セッション名 | 件数 |
|-------|--|----|-------|---------------------|----|
| OS-1 | 計算社会科学 | 9 | OS-13 | AI を人と社会の側から考える | 7 |
| OS-2 | 食と AI | 8 | OS-14 | 不安を緩和する AI | 5 |
| OS-3 | 自律・創発・汎用 AI アーキテクチャ | 8 | OS-15 | 脳波から音声言語情報を抽出・識別する | 5 |
| OS-4 | データ流通エコシステムのデザイン | 4 | OS-16 | 暗黙知のモデル化と演算可能性 | 8 |
| OS-5 | データサイエンスの普及と自動化 | 7 | OS-17 | AI と制約プログラミング | 9 |
| OS-6 | 複雑化社会における意思決定・合意形成のための AI 技術 | 9 | OS-18 | 世界モデルと知能 | 14 |
| OS-7 | 移動系列のデータマイニングと機械学習 | 13 | OS-19 | グループインタラクションと AI | 9 |
| OS-8 | リーガルテックと AI ～法務・契約業務への応用～ | 5 | OS-20 | 人狼知能と不完全情報ゲーム | 9 |
| OS-9 | “ナッジ” エージェント：人をウェルビーイングへと導く環境知能システムの構築へ向けて | 6 | OS-21 | ICT による食糧問題の解決 | 4 |
| OS-10 | AutoML（自動機械学習） | 4 | OS-22 | 創作者と人工知能が創る創作の未来 | 10 |
| OS-11 | 人工知能におけるプライバシー、公平性、説明責任、透明性への学際的アプローチ | 8 | OS-23 | 臨床の知一厚い記述がもたらす知一 | 8 |
| OS-12 | 広告と AI | 10 | OS-25 | Affective Computing | 9 |
| | | | OS-26 | 人工知能と倫理 | 8 |

特集 「2020年度人工知能学会全国大会(第34回)」

特別セッション「インタラクティブセッション」

杉浦 純(ヤフー株式会社), 倉山 めぐみ(函館工業高等専門学校),
田中 駿(フューチャー株式会社), 岡田 雅司(パナソニック株式会社)

インタラクティブセッションは、ポスタ形式の発表スタイルで発表者と聴講者が直接議論できるセッションである。本大会では大会3日目(6月11日)と4日目(6月12日)に1セッションずつ計2セッション、100分ずつ開催された。合計184件(3日目92件, 4日目92件)の発表があり、これは昨年度の93件、一昨年度の108件と比べると大幅な増加となった。また、参加者の増加、一般セッションでの発表増加に伴ったものともいえる。本大会では、オンライン形式での開催に伴い、管理可能な並行数の都合などの理由から、各セッションをさらに三つの時間帯に区切り、各発表・質疑応答は30分ずつ、最大32名の発表が並行して行われる形式へと変更となった。例年では100分あった発表・質疑応答の時間が短縮となり、十分な議論の場が提供できるのかは開催前からの懸念点であった。これに対し、事前に発表ポスタをアップロードし聴講者があらかじめ内容を確認しセッション中は質疑に集中できるようにし、Slack上で事前に発表内容を告知する場や、発表後に質疑応答を継続する場を提供するなど、議論の場を提供できるように工夫を施した。

しかしながら、実際に開催中や開催後に「時間が短かった」という声は複数あり、ここはオンライン開催での今後の課題として大いに検討していきたい。一方で、例年であれば会場スペースの都合上混雑が発生しじっかりと聴講・議論できないなどの課題があるが、本大会では一つの発表に対して同時聴講者が30人を超える中で議論されている様子があり、上述したように発表後にも活発にSlack上でオープンに質疑応答が交わされるなど、オンライン開催ならではのポジティブな効果も得られた。

インタラクティブセッションの魅力は、発表者および聴講者が十分に議論できる点や、多様な領域にまたがる人工知能分野の研究を一望のもとに見渡すことができる点などである。次年度以降も、現地開催であれオンライン開催であれ、これらの役割を果たしていけるよう本大会の反省を生かしていく必要がある。

さて、インタラクティブセッションでは、会場での聴講者による投票をもとに「大会優秀賞(インタラクティブ

発表部門)」が選出される。聴講者は、発表のわかりやすさ・インパクトと今後の発展性の観点から受賞にふさわしい発表を最大5件まで投票することができる。例年ではプログラム冊子に付属の投票用紙および会場内で配布される投票用紙による投票であったが、本大会ではすべてオンラインシステムでの投票となった。また、本大会では、投票にご協力いただいた方に抽選で特製スタッフTシャツをプレゼントすることとした。Slack上や各発表会場にて投票を呼びかけ、その結果両日とも多数の投票をしていただき、最終的に9件の発表が受賞することとなった。投票にご協力いただいた方に感謝するとともに、受賞者を祝福したい(詳細については、別途確認されたい)。

◆大会優秀賞(インタラクティブ発表部門) 題目一覧:

- 隠れた良作の発掘を助ける Web 小説推薦システムの構成と評価
- 出力長制御と重要箇所の特定を同時に行う生成形要約
- Wi-Fi 接続による屋内位置情報を用いた人間関係の抽出
- アイスホッケー動画をを用いた戦略分析フレームワークの提案
- 人手評価を考慮した強化学習に基づくニュース見出し生成
- 高速な情報検索に向けた文脈考慮型スパース文書ベクトルの獲得
- 人が感じる痛みの説明を補助するための形状変化装置の開発
- インターネット広告におけるキーワードに基づく広告文の自動生成
- BERT を利用した感情生起要因推定手法の検討

初めてのオンライン開催ということもあり、発表者や聴講者の現場では我々の把握しきれていないさまざまな不都合もあったことが推察される。そのような状況の中でも、発表者の方々や聴講者の方々、スタッフの方々にご協力いただき、無事にインタラクティブセッションを終えることができたことに担当者一同、心から感謝したい。

特集 「2020 年度人工知能学会全国大会（第 34 回）」

学生企画「各世代の AI 研究者に問う—『善く生きる』の捉え方—」

油谷 知岐（大阪府立大学），古池 謙人（東京工芸大学）

1. 企画趣旨

「人工知能（AI）」が提唱されてから現在に至るまで、AI 研究は「ヒトの知能」の学究に向けて目覚ましい発展を遂げてきた。この発展は、各時代の AI 研究者が自身の研究観や人生観と照らしながら、描く未来（知能像）を定めた指向性のある研究遂行に取り組んだ成果である。

ところが現代の AI は、提唱当初とは取り巻く社会の状況が一変し、「学究の対象」だけでなく「問題解決の道具」として身近な存在となっている。両者の意義はいまや AI 研究の両輪である一方で、道具的意義ばかりが社会的注目を集める現状にある。この潮流に身を任せてしまうだけでは、知見の積上げを指向しない散発的な研究遂行となり、AI 研究の継続的な発展を難しくしてしまう。

このため、特にこれからの AI 研究では、どんな未来に到達したいか、そのためにどんな知見を創出するか、といった将来展望（以下、Vision）を各研究者が見据え、積上げの指向性を意識した研究遂行が重要である。

そこで本年度の学生企画セッションは、「『善く生きる』の捉え方」をテーマに、「我々現代の AI 研究者にとっての Vision について、深く考える機会の創出」を目的とした。そこで、異なる背景に裏打ちされた多様な Vision を顕在化する議論の場をデザインした。具体的には、Vision は世代や研究分野の影響を受けると考え、異なる世代および研究分野から 3 名の AI 研究者をお呼びした。溝口理一郎氏（北陸先端科学技術大学院大学）と池上高志氏（東京大学）、田和辻可昌氏（早稲田大学）をお迎えし、それぞれのお立場から、自らにとっての「善く生きる」についてご講演いただいた。

本企画では、講演者だけでなく聴講者の思想や疑問も議論の場に顕在化させることを狙いとして、講演者の議論に対する会場からの質問およびコメントをアンケートサイト（Sli.do）により収集し、動的に議論を実施した。以下に本方式に基づいて展開された議論の概要を述べる*1。

2. セッション内容

2.1 各ご講演の内容

最初に、田和辻氏から、自身の研究である「不気味の谷現象」の解明を指向した定性的脳機能モデルの構築に、

どのように従事してきたかをご紹介いただいた。また、この研究を通じて培った思想や、学位を取るにあたっての苦悩や努力をご講演いただいた。

次に、溝口氏から、パターン認識に取り組んだ学生時代から現在のオントロジー工学の研究に至る過程とともに、思想的な変遷や変わらなかった哲学、ご自身の研究遂行を支える基本原則をリスト化してご講演いただいた。

最後に、池上氏から、人工生命の研究を主として、心や意識、生命といった捉えどころがなくとも確かにそこに「在る」ものを見いだそうとする取組みの思想を具体的な研究内容と接地する形でご講演いただいた。

2.2 全体議論

セッションの後半では、講演者の 3 名に、企画委員と聴講者の皆様（Sli.do に寄せられた質疑やコメント）を加えて、「善く生きる」の考えを掘り下げる議論を展開した。ここでの議論テーマは多岐にわたったが、特に「研究者としての喜びをどこに見いだすか」や、「研究者として譲れない一貫性」といった趣旨の議論では、思想の対立が顕在化して白熱した議論となった。

3. 事後アンケートの収集と結果

本セッションには 50 人強のご参加をいただき、終了後には任意回答のアンケートを収集した（N=16）。この結果のうち、聴講者の世代および所属を図 1 に、本セッ

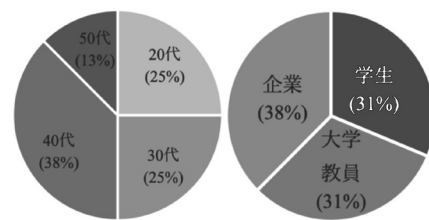
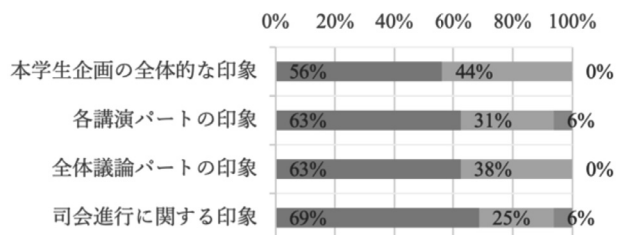


図 1 聴講者の世代および所属の傾向



■とても良かった ■良かった ■どちらでもない
■悪かった ■とても悪かった

図 2 本セッションに対する評価のまとめ

*1 会場からいただいた質疑への講演者からのコメントを「人工知能学会全国大会 2020 学生企画ページ」で公開しているので参照されたい (<https://www.ai-gakkai.or.jp/jsai2020/student>).

セッションの評価を図2に示す。これらから、幅広い聴講者がいる中でも、セッションへの満足度は非常に高く、否定的な評価がないことがわかった。また、自由記述の回答にも、「普段聞くことのない根底にある個性的な考えを聞けて良かった」といった肯定的な意見が多数寄せられた。

4. 総括

セッションでの内容やアンケート結果から、本企画で

狙いとした「現代のAI研究者にとってのVisionについて、深く考える機会の創出」が達成できたといえる。

ご講演いただいた溝口氏、池上氏、田和辻氏のお三方に衷心より感謝を述べるとともに、本企画にご参加いただいた皆様に多大なる感謝を申し上げます。

特集 「2020 年度人工知能学会全国大会（第 34 回）」

企業参加推進担当活動報告

米納 弘渡（名古屋大学）、伊藤 雅弘（(株)東芝）、原田 智広（東京都立大学）、吉田 諭史（NEC）

近年の人工知能ブームにより、人工知能は大学のみならず、経済産業界からも大きな関心をもたれている。そうした背景を考慮するなら、人工知能に関連する国内研究者が一堂に集う年次大会である本大会の役割の重要性はより大きなものとなっていると思われる。そうした中、本年も昨年に引き続き、産業界からの参加を促進する施策の一環として、本大会を支援いただく企業スポンサーを募集した。本年も昨年と同様に、スポンサーの種類として、プラチナ、ゴールド、シルバー、およびメディア協賛を設け、プラチナ、ゴールド、シルバーのスポンサーの中から冠スポンサーを募集した。冠スポンサーの種類は、ランチョン・ナイトセミナー、茶菓、参加者交流会屋台、受付コーナーの 4 種類である。本年は、昨年あった無線 LAN と弁当配布支援の冠スポンサーについては募集しなかった。スポンサー募集は 2019 年 1 月初旬から同年 3 月上旬まで行い、合計 80 社以上の企業の皆様からスポンサー申込をいただくことができた。なお、スポンサー数、企業展示、インダストリアルセッション発表数、ランチョン・ナイトセミナー数の詳細は図 1 のとおりである（ただし、本年分のスポンサー数、企業展示数については応募数を、それ以外はすべて実施数を示した）。

しかし周知のとおり、本年の年次大会は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大のため、予定されていた熊本城ホール、熊本市民会館での開催を中止し、オンラインで Zoom を用いて開催することとなった。年初に熊本の会場の下見をし、できたばかりの会場を見ていただけない、非常に残念であった。また、オンライン大会ではスポンサーとなっていただいた企業の皆様に十分な価値を提供できないと考え、スポンサー費についても全額返却とし、企業展示は実施しなかった。

ランチョン・ナイトセミナーおよびインダストリアルセッションの中止も一時は検討したが、最終的には実施することとした。オンラインでも発表を希望して下さる企業が少しでもあれば実施する意義はあると考えたためである。しかし、オンラインでの発表希望数は想像以上であった。非常にありがたいことに、もともと発表を予定していた企業様方の大半がオンラインでも発表を希望して下さり、ほとんど元々予定していたおりのスケジュールでランチョン・ナイトセミナーとインダストリアルセッションを実施することができた。企業の皆様が本大会での発表に大きな意義を見いださっていることを再確認した。また、企業の皆様の発表

を聴講し、産業界からの人工知能研究への大きな期待は COVID-19 の感染拡大により増えこそすれ、減りはしていないとも感じた。ご協力をいただいた企業の皆様に、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

企業参加推進担当委員は、昨年に引き続き本年も、主担当 2 名、副担当 2 名の 4 名で対応にあたった。本年は、昨年副担当であった米納、伊藤が主担当を、新規の原田、吉田が副担当をさせていただいた。来年は、本年の副担当 2 名が主担当を行う予定である。

本年の年次大会はオンラインで Zoom を用いて行ったため、参加者には、大会参加のための入場証としてメールが送付された。参加者は入場証メールの指示に従うことで、各発表会場に対応する URL、Zoom のミーティング ID、パスワードが記載された pdf を得ることができた。また、事前に接続テストのための機会も与えられていた。

上述したとおり、本年の本大会では企業展示の開催を中止し、ランチョン・ナイトセミナーおよびインダストリアルセッションのみ実施した。ランチョン・ナイトセミナーについては、昨年は 9 セッション実施し、本年も 9 セッション実施した。また、インダストリアルセッションについては、昨年は一昨年より 1 セッション増やし 5 セッションを実施し、本年も昨年と同様 5 セッションを予定・実施した。なお、応募数はそれ以上であった。インダストリアルセッションの発表を聴講していると、一般・企画などの他セッションでの社員の方々の発表情報を知らせる発表が多くあり、本大会を通して、産学の交流が促進されていることを実感した。本学会全国大会に大会委員として関わられたことを大変光栄に思う。また、さまざまお世話になった事務局および大会委員の皆様にも、心から感謝申し上げます。

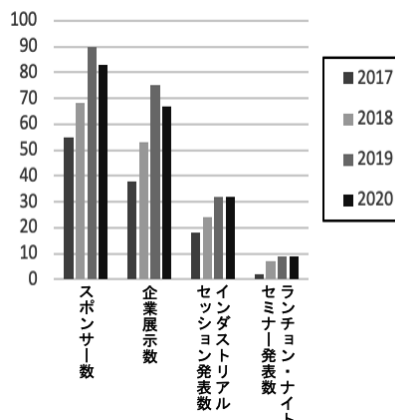


図 1 スポンサー数および各種件数

特集 「2020年度人工知能学会全国大会(第34回)」

近未来チャレンジ総括

成松 宏美 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所), 林田 尚子 ((株)富士通研究所)

1. はじめに

今年は近未来チャレンジという21年続いた人工知能学会特別企画の最終年度であった。近未来チャレンジは、5年以内で社会貢献できる現実路線の人工知能技術テーマを募集し、優れたものを学会としてサポートすることにより、強力なAI技術を世の中に送り出すことを目的として1999年の全国大会から始まった特別企画である。テーマに応募し採択されれば、全国大会でセッションを最長4年間開催できる。継続可否については、毎年の大会の聴講者アンケートに基づいて決定され、無事に4年間開催でき聴講者の納得を得られた場合に卒業となり、翌年に卒業セッションが開催できる。本企画は一定の成果を得られたことから、2016年度で新規のテーマ募集を終了し、継続中のセッションを開催してきた。

2020年度の全国大会では、昨年度に無事に卒業が決定した、最後の卒業セッション1件および大会懇親会にて修了認定証授与式を開催した。本稿では、近未来チャレンジの総括と今年度の活動模様について報告する。

2. 近未来チャレンジの歴史

本企画は、1999年に始まって以来新規募集テーマ修了の2016年までの17年に47件の応募があった。採録されれば全国大会にてテーマセッションを最長4年間開催できるが、継続の可否(=サバイバル成功・失敗)については毎年セッション会場において聴講者に配布したアンケートの集計結果に基づいて行われる。そのため、無事に4回サバイバルし卒業できたテーマは14件であった。

聴講者アンケートでは、学術的観点、社会貢献の観点、および総合評価について5段階の評点が付けられ、各観点にて決められた評点以上の場合に次のサバイバルチャレンジができる。聴講者は各分野の専門家として厳しい目線で評価するため、オーガナイザにとっては、毎年の大会が次のチャレンジに進めるかどうかの緊迫感のあるものとなる。一方で、聴講者アンケートの自由記述欄では、次につながる貴重なアドバイスも多く寄せられ、生の声が聞ける良い機会でもある。近未来チャレンジでは、聴講者アンケートの集計結果および聴講者の生の声をWebに掲載することで、数多くの知見を提供してきた。

また、このチャレンジをきっかけに社会貢献できた事例も多数報告をいただいている。昨年度の全国大会で行われた企画セッション「22世紀チャレンジ～これまでの近未来チャレンジとこれから～」では、歴代のチャレンジの様子についての報告もあり、本企画がAIとその周辺領域の進化に多大な寄与をした企画であることがう

かがえた。本稿では、概要のみの報告にとどまるが、詳細については、ぜひ近未来チャレンジWeb(<https://www.ai-gakkai.or.jp/CREP>)を参照されたい。

3. 今年度の活動模様

今年度は、昨年度の大会で無事に卒業が決定した「世界価値観と国際マーケティング」のテーマ1件に関する卒業セッションおよび修了認定証授与式を開催した。本テーマでは、人の属性だけでは容易に表せない「価値観」に着目し、価値観の表現や価値観に合わせたサービス提供につながる技術の実現に向けてチャレンジしている。

今回の卒業セッションでは、人工知能学会での発表および聴講をきっかけにオーガナイザどうしが出会いテーマ応募に至った経緯や、これまでの取組みで実現できたことを紹介いただいた。また、今回は、オーガナイザにとってセッション開催の最終年度であると同時に、近未来チャレンジ自体が最終年度であることから、その総括として、近未来チャレンジを長年取りまとめてきた阿部明典先生の講演も企画された。歴代のチャレンジの統括報告もあり、最後の卒業セッションとしても盛り上がる企画であった。ディスカッションの中では、次のプロジェクトとして国際的な連携を進めることに期待する声もあった。本テーマの今後の発展に期待されたい。

今年はオンライン開催となり聴講者と直接顔を合わせることが難しかったもののセッションの聴講者も多く、無事に卒業セッションおよび修了認定証授与式を行うことができた(図1)。



図1 卒業セッション(左)と修了認定証授与式(右)の様子

4. おわりに

本企画を通して、我々も歴史ある企画の運営という重要な任務を任されていたことを実感した。本企画で得られた知見やつながりが今後も人工知能の発展に寄与することを期待している。本企画の発起人である大澤幸生先生、長年取りまとめをされた阿部明典先生、歴代の近未来チャレンジ担当の皆様、ご参加・聴講いただいた皆様に、御礼申し上げます。ありがとうございました。

NFC-1「世界価値観と国際マーケティング」

チャレンジャー：谷田 泰郎(合同会社ことのは研究所)、
加納 史子(コペンハーゲンビジネス
スクール)

「NFC-1 世界価値観と国際マーケティング」は、本年度が近未来チャレンジの卒業セッションとなった。最終セッションでは、一般報告はなかったが、本提案が近未来チャレンジの最終のテーマということもあり、近未来チャレンジの立上げ時からさまざまなテーマや運営に関わって来られた阿部明典氏(千葉大学)を招待講演者としてお迎えし、加えて本セッションの提案者である加納史子氏と筆者が5年間の振り返りとまとめの報告をするという会議構成で開催された。

阿部明典氏の講演では、本学会における「近未来チャレンジ」の企画が提案された頃の話もあった。「近未来チャレンジ」は、AI第2世代(1980年代～1990年代)からAIが冬の時代に差しかかった1999年、大澤幸生氏(当時 大阪大学、現在 東京大学)によって提案された。冬の時代に入るのは社会の期待に応えられなかったからにはほかならない。その期待に応じて春を迎えるためには、「100年先ではなく、人が耐えられる長さで、社会に役立ち実際に使えるものを実現する」という姿勢が必要だったのであろう。近未来チャレンジのさまざまなチャレンジの紹介と賛辞が述べられ、5年という期間で社会応用と学術を両立させる難しさ、評価の厳しさなどが語られた。本セッションの評価やさまざまな声に関しても語っていただいた。講演の最後の「近未来チャレンジが終わったからと言って、AIにチャレンジがなくなったわけではない。さらに難しい課題が残っている」、「次なるチャレンジは何か？ 人間の本质を探す？ より人間的なAIを追求する？」といった阿部氏の言葉が心に残った。社会が過去にない大きな変化を遂げようとしている今、確かにAIの冬の時代に適応したチャレンジは役割を終えたのかもしれないが、これから先の時代に適応したチャレンジが始まるのだろう。とはいえ、阿部明典氏のように「近未来チャレンジ」の過去を観てきた研究者による、後世への語り伝えは大事である。「近未来チャレンジその後」のような集大成になる本をまとめたことだけを期待している。

本セッションでは、「価値観」と「グローバル」という難解な二つの大きなテーマを扱っている。提案者でもある加納史子氏による「UMAMI: Understanding Mindsets Across Markets, Internationally」(UMAMIは、コペンハーゲンビジネススクール、デンマーク工科大学、デンマークの観光関連行政組織、Carlsberg社の観光施設が参加する2017年開始のプロジェクト(4年間)で、世界価値観データベースをマーケティングやツーリズムの学際的研究で活用されている尺度と組み合わせ

て機械学習による観光客のセグメント化、セグメント別行動予測などを目指すもの)は、本セッションを立ち上げたことによる大きな成果の一つである。加納史子氏からはその活動報告を主軸にしたビデオによる報告があった。具体的には、UMAMIプロジェクト(2017～20)では、デンマーク観光庁、コペンハーゲン観光局、北シーランド島観光局とともに、デンマークへのインバウンド観光客の価値観を分析・セグメント化し、旅行者ペルソナを開発、サステナブルツーリズムやスマートツーリズムなどのテーマに絞った商品開発やマーケティングに役立てるということを行った。また、新型コロナウイルス感染症に対する意見や行動に関する国際調査から価値観の違いによる意見や行動の違いの分析をしている。今後、デンマーク観光庁、コペンハーゲン観光局、博物館などのパートナーとともに、ポストコロナの新ノーマルに対応した、新しい観光コンセプト(サステナブルツーリズム、スマートツーリズム、セーフツーリズムなど)を、価値観タイプのペルソナを適用して開発するBEHAVEプロジェクトを企画中である。未来に対応する新しい規格の「世界価値観と国際マーケティング」に関して、加納史子氏のチャレンジはまだ続く。

本セッションにおけるUMAMIプロジェクト以外の成果を以下にあげておく。

- Societas(シナジーマーケティング株式会社)による価値観マーケティングの実践
- クリエイティブゲノム(佐々木淳氏、(株)AOITYO)、物語生成(小方孝氏、岩手県立大学)と価値観研究の融合

課題のほうは、あげればきりがないのでやめておく。課題は、将来のチャレンジの成果報告で解題していく。

佐々木淳氏とは「価値観HIコンソーシアム」で始めた感性価値観マップに関する開発を続けている。価値観というのは正解のないラベリング問題である。そのラベリングで機械学習モデルをつくって実践しても、それが本当なのかは誰にも証明できない。ABテストのような実践応用を実施しなければ、統計検定によるもっともらしさすらわからない。価値観はヒトが主観的に感じるものである。しかし、本当にそんなものがあるのか。ヒトの心から主観的に捉えた価値のラベリングは危うい。実践応用を考えるのなら、モノ、コトに存在する価値を客観的に見た価値のラベリングが近道である。

5年というのは長いようであつという間だった。著者の価値観とコミュニケーションの研究は、この先も場所を変え続けていくチャレンジである。最後に、本学会の近未来チャレンジご担当の方々、研究報告をしてくださったの方々、本当にありがとうございました。

[谷田 泰郎(合同会社ことのは研究所)]